

【学年】 5年		【教科・単元など】 社会 「水産業のさかんな地域をたずねて」(全8時間) 導入	
【本時目標】 実物大の魚を描いた後の自分の感想や疑問を交流し、調べてみたいことを明確にする。			
【実践の概要と子どもの様子】			
自分たちの食生活の多くに取り入れたられている「魚」。改めて見渡してみると、切り身になって売いたり、粉末になっていたり、干物になっていたり、姿や形を変えて、頻繁に食卓に上っていることに気が付いた。すしネタでは人気であったマグロ、焼き魚ではサンマ、だしはカツオと、大好きな魚について熱く語る子ども達。でも実際にみたことあるか？と聞くと姿焼き以外のものについては、よくわからない様子。そこで、「実際の大きさで、よく食べる魚を描いてみたら？」と声をかけると、「やってみたい！」ということで、実物大の魚を描いてみるようになった。 まず、子どもたちがやっていたのは、図鑑や実物で大きさを調べる。図鑑で調べる子たちは、数字に驚き、長さをメジャーではかる。「でっけえ！」「すごい、先生、模造紙1枚じゃたりないよ」「2枚でもきびしくない？」 サンマなどは実物を朝1番で購入し、教室に持ってきて、見ながらスケッチした。「きれ～い！」「目がウルウルしてるよ」「つやつやで、うろこが見えない」「昨日まで生きてたのかな」などつぶやきながら作業をしていた。書きあげるまでに数時間かかったが、朝の時間や休み時間を使って、熱心に仕上げる子ども達。 書きあがり、感想や疑問を交流しながら、これから調べていきたいことを整理することにした。小さな紙に自分の疑問や感想を書き(一人複数枚も可とした)、黒板にはっていく。友達と「同じ・ちかい」ところに、自分の紙を貼っていく。書きあがった人から貼っていくが、友だちの書いた紙を見ながら、また新たな感想や疑問を思い出し、考えたりしていた。疑問のコーナーに集まった紙のまとめごとに名前をつけ、以下ようになった。			
つり	どうやってでかい魚をつるのかな？ 何人でつっているのかな？ 一日何回つるのか？ どれくらい大きな船でつるのか？ どんな道具を使ってつるのか？ つれる場所はどこなのか？ 一回に何匹つれるのか？ 何種類くらいの釣り方があるのか？ 魚によってつり方は変わるのか？	つる人 切る人 旬 生態	大変じゃないのか？ 何人で魚をつっているのか どうやってマグロをさばくのか？ どの時期が一番とれるのか？ おいしい時期はいつか？ この大きな魚の天敵はいるのか？ 何を食べて生きているのか？ 歯は何本あるのか？ 何メートルまで大きくなるのか？ マグロは何年生きるのか？
値段	一匹何円くらいするのか？		
知的好奇心について			
魚について「知りたい」「調べてみたい」と思うには、普段の食生活以上に何らかの出会いが必要であると考えた。実際の大きさで魚を捉えてみる、実物を眺めてみるという活動は、そうした子どもたちの知的好奇心を生み出すために設定したものである。「でかい！」「傷一つついていなくてきれい！」という感動が、「どうやってとるか」に直結する。とり方や道具などパッと想像しにくいところにも、「調べてみたい」と思わせる要素がある。そして理解が難しい子でも「調べてみたいこと」が考えやすい活動であった。また、友だちと共有することで、自分では思いつかないことも「調べたい！」と思えるものに出会えるように工夫した。			
【子どもの様子・反省】			
何枚も小さな紙に調べてみたいことを書いたり、感想を書いたりする子がたくさんいた。自分の書いた紙をどこにはってよいかわからない子が最初はたくさんいたが、「貼ってあるものをよく読んでごらん」と声をかけると、友だちの意見を読んで、近いものにはれる子が増えていった。調べたいことをあげていると、ここで私がねらっていた漁法や値段、漁業にかかわる人についての学習課題がたくさん出てきたが、それ以外の、「魚の生態」についても多くの疑問が寄せられてしまったことは、一つの反省点である。実際には、図鑑等で生態についての疑問を解決しながらも、自分が興味を持った魚についての漁法も調べていくことにした。 調べたことは、魚ごとに交流し、いろいろな漁法について学習することができた。魚の種類によって船の仕組みが異なったり、漁場が違ったりし、それぞれの特色や漁師の苦労が明かになっていった。さらに互いの調べたことに対し、質問したり、もっと調べようとしていたり、さらに追究してみようとする姿勢がみられた。			

